

褥瘡予防と再発防止に不可欠なシーティングの考え方

～適切な車椅子での座位姿勢とクッションを提供するために～

山崎泰広
順天堂大学 医学部 整形外科学講座 非常勤講師

Point

- ▶ 褥瘡患部を見るだけでなく患者さんの姿勢との関係を考えてみましょう
- ▶ 尾骨部の褥瘡予防・再発防止は骨盤後傾の改善が不可欠です
- ▶ 坐骨部の褥瘡予防・再発防止は骨盤の片側への傾きの改善が不可欠です
- ▶ クッションの材質について理解することが大切です
- ▶ 除圧クッションとシーティングの活用によって褥瘡予防・再発防止は可能です

はじめに

私がシーティングセミナーで、まず受講者に問いかけるのが「車椅子とベッド上ではどちらが褥瘡を生じやすいか」という質問です。大半は「車椅子」と答えます。しかし仰臥位で褥瘡が生じる危険性のある部位は、仙骨部、胸椎部、肩胛骨部、肘部、踵部、後頭部など、側臥位では、大転子部、腸骨稜部、踝部、臍部、肘部、顎関節付近などで。それに対して座位で褥瘡の生じる危険性のあ

る部位は、左右の坐骨部、尾骨部、肘部だけなのです(図1)。さらに正しい座位姿勢が提供できれば、尾骨は座面から浮いた状態になるため、褥瘡の危険性はなくなります。身体の片側への傾きを防止できれば、低い側の坐骨部に生じる褥瘡は防止でき、片側の肘部に褥瘡が生じるような圧はかかりません。姿勢の改善だけでも多くの褥瘡が予防できますが、今日では多くの優れた褥瘡予防

クッションが手に入るため、車椅子上で褥瘡を予防または再発防止するほうがベッド上よりも簡単なのです。さらに、患者が起きあがり、動き回り、活動することが可能になるため、血液の循環など医学的な効果に加え精神的な恩恵も得られます。

不快な車椅子と快適なベッド

しかし、下肢に障害のある人、とくに介護保険の対象となる高齢の障害者に提供されている車椅子やクッションには最低限の機能しか備わっておらず、褥瘡予防のための姿勢の提供ができない車椅子やクッションが大半です。そのような車椅子では痛みや疲れが生じ、長時間使用することは不可能です。その結果ベッドへの移乗回数が増え、介護負担が増大します。車椅子が不快な場所であり長時間使用することで褥瘡の危険性が高まると、ベッドで過ごす時間が長くなります。

長時間過ごすベッドには快適性、褥瘡予防、介護軽減のために電動ギャッチアップ機能を付け、エアマットを使用し、様々なピローやクッションを使用します。ベッドには車椅子の何倍もの費用をかけているのです。それでも臥位では褥瘡の危険性の高い部位が多いため、体位交換を頻繁に行う必要があります。ベッド中心の生活では褥瘡予防に手間が掛かり介護負担は減らないのです。

それでもベッドの方が快適だと、一日の大半をベッドで過ごし、トイレや食事、通院など必要最小限の時にしか車椅子を使用しない高齢者が極めて多いのが現実です。そのような車椅子は単なる「移動・運搬の道具」です。短時間しか使用しないので、軽い、安い、介助しやすい、といった介助者のメリットが重視され、安定性、快適性、機能性の提供は軽視されています。

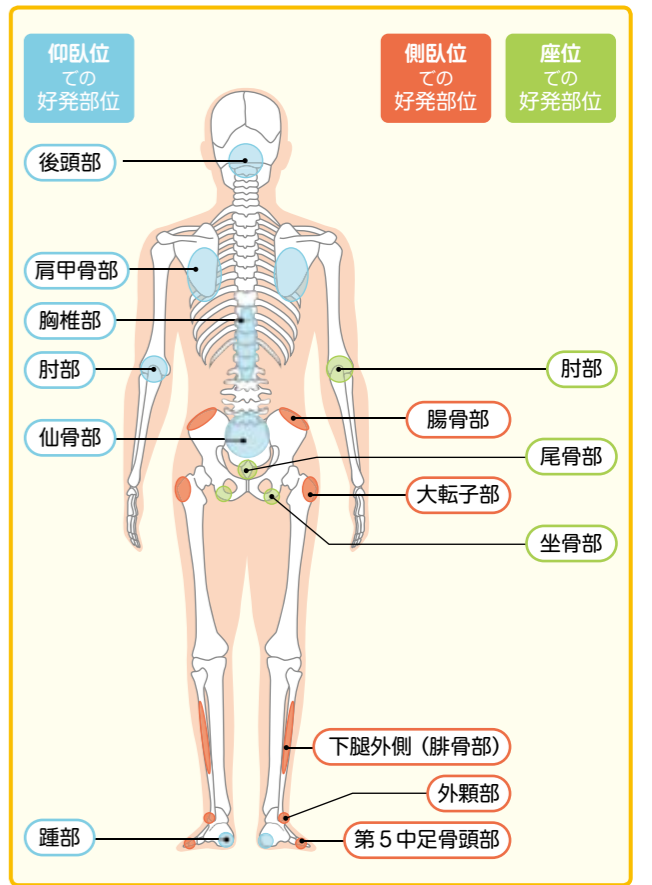


図1 褥瘡の好発部位

「生活の場」としての車椅子

日本には「車椅子に2～3時間乗っていられば十分」と考えて車椅子を提供している医療・介護関係者も少なくありません。しかしそれは世界の常識から外れています。欧米では車椅子は車椅子使用者の「生活の場」と考えられています。ベッドではなく車椅子で生活することが目的。そのために一日中快適に過ごすことができ、残存機能を最大限に発揮できるように「シーティング」の考えをもとに使用者に合わせて調整できるモジュラー型車椅子を使用し、褥瘡予防クッションやバックサポートを提供します。車椅子で快適に一日中過ごすことは可能なのです。欧米のシーティング先進国がそれを実証しています。